

Ⅱ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業の要点整理

1 「授業づくりの12のポイント」の作成

本研究ではユニバーサルデザインの視点は、長江・細渕（2005）の「授業のユニバーサルデザインの7原則」に準ずることとした。しかし7原則は、あくまでも視点を示したものであるため、検証授業を実施する際に授業者がユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を設計するためには、より具体的な例示が必要であると思われた。

そこで、先行研究を参考に長江・細渕（2005）の7原則をより具体化し、「授業づくりの12のポイント」として整理した（表2）。

そして、これを基に実践事例集「Ⅰ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりの12のポイント」を作成した（p.22～71）。

表2 授業づくりの12のポイント

項目	概要	具体例	ユニバーサルデザインの視点
1 教室環境1 「場の構造化」	<p>構造化とは、「いつ」「どこで」「何を」「どのように」行動すればいいのかわかりやすくするために、目に見える形で提示することをいう。そうすることで、児童生徒が迷わずに自発的に教室での作業に取り組むことが期待できる。</p> <p>教室での構造化には、①見ただけでわかるように明瞭に表示する、②空間を目的別に仕切る、③合理的にものを配置する、などの方策がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・整理整頓 ・提出箱の設置 ・空間を目的別に区切る（教室のレイアウト） ・立ち位置を示す（マーカー、三角コーン等） 	<p>「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」</p> <p>→場と目的、道具と行動等の対応を明確にすることで、「何をすればいいのか」視覚的・直感的に把握しやすくなる。表示や説明を加えるなどに加えて、「場をわかりやすく構造化」する工夫が求められる。</p>
2 教室環境2 「刺激への配慮」	<p>集中しやすく、落ち着いて学習に取り組みやすい環境にするには、教室の刺激の量を減らす配慮が必要である。児童の注意をそらしたり大切な情報をわかりにくくしたりする余剰な刺激（情報）を取り除き、必要な情報に集中できるわかりやすい教室環境をつくる必要がある。</p> <p>配慮したい刺激として、①目障りとなる視覚刺激、②不要で不快な聴覚刺激、③影響し合いがちな人的刺激が挙げられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚：簡素な黒板周り、棚に目隠しカーテン ・聴覚：椅子の脚にテニスボール ・人的：座席の配慮、パーティションの活用 	<p>「①全ての児童生徒が参加できる授業」</p> <p>→安心して参加し、授業に集中するためには、第一に不安材料や集中を妨げる要因の軽減又は排除が不可欠である。特に視覚や聴覚など感覚刺激に過敏な児童生徒もいるという前提で教室環境を見直したい。</p>
3 ルールの確立 (手順や工程)	<p>ルールというと個人の振る舞いを制限したり、統制したりするものと受け取られるかもしれない。しかし、本来、ルールは、集団生活に於いて適切な行動を示し、具体的にどのように振る舞えばよいのかを教えてくれるものである。ルールが不明確な状況は、不要なトラブルを増やしかねない。</p> <p>ここでは、教室のルールを事前にわかりやすく示し、みんなで共有する手立てを示す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・声の大きさ ・鉛筆の持ち方 ・話を聞く姿勢 ・発言の仕方 ・発表の仕方 ・手順や行程 ・朝の身支度 ・掃除の手順書 	<p>「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」</p> <p>→その場その時の状況に応じた適切な対応ができない場合、「ふざけている」「怠けている」と決めつけず、もしかして「状況理解が不十分だからでは」と考え、わかる工夫を凝らしたい。</p>
4 生活の見通し	<p>児童生徒が主体的に判断し、意欲を持って行動するためには、生活に見通しが持てることが重要である。「これから何をすればいいのか」「自分は今、何に向かっていているのか」を視覚的にわかりやすく示すことが大切になる。</p> <p>また、「忘れ物はないか」など、重要な事項を記録したり確かめたりすることも大切な生活の力である。一日のスケジュールや一週間の予定などを自己管理し、生活の見通しを持たせるための工夫やアイデアを示す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割の工夫 ・予定表の工夫 ・手帳やノート、メモ帳の活用 	<p>「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」</p> <p>→時間を意識し段取りよく行動するためには、時間の見通しを持つことが必要になる。その意識を高め、必要に応じて確認できるように、視覚的に情報を整理して提供したい。</p>
5 授業の見通し	<p>授業のめあてや流れを明示することで、見通しを持って授業に臨むことができ、主体的な学びが期待できる。</p> <p>学習活動の始まりと終わりを明確に示し、いつまでに何をするのか、どこまでやれば終わりなのかなど、具体的に示すことがポイントとなる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のめあてや流れの掲示 ・「授業の今」を示す ・課題ボックス ・アラームやチャイムの活用 	<p>「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」</p> <p>→児童生徒の学習への意欲や努力を持続させるためには、目標や目的を目立たせ、時間の見通しが持てるための工夫が大切になる。</p>
6 授業の組み立て	<p>授業を展開する上で配慮したい点として、①教科の特性に応じた一定の型があること、②活動にメリハリをつけること、③活動の区切りを明確にし、複数の活動を同時に行わないことなどが考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回、一定の流れで進む授業スタイル ・一斉指導とグループ指導 	<p>「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」</p> <p>→授業そのものの構造化。</p>

項目	概要	具体例	ユニバーサルデザインの視点
7 板書の工夫	<p>板書の目的は、視覚に訴え、思考を深めることにある。そのままでは消えてしまう言葉のやりとりを板書の形に整理することで、児童生徒の思考の拠り所となる。</p> <p>ポイントとして、①「めあて」が明示してある、②授業の全体像と流れが視覚的に把握しやすい、③今、何を学習しているのか明確となっている、④適時確認でき、振り返りができる、⑤見やすい、などが挙げられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・めあて、ポイントなどの表示 ・チョークの色（白と黄が基本） ・板書は残す ・ホワイトボード、プロジェクターの活用 	<p>「①全ての児童生徒が参加できる授業」「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →話し言葉だけでなく視覚情報を適切に添えることが重要となる。黒板はそのための基本ツールである。</p>
8 集中・注目のさせ方	<p>聞き漏らしを無くし、学習に集中させるためには、注意を喚起し、児童生徒自らが対象に意識を向けることが大切となる。それには、不注意な児童生徒にその都度、個別に注意を促すのではなく、なにより本人の「聞く構え」を育てることが重要となる。</p> <p>具体的には、①注意を促す指示や合図が明確である、②ルール化する、③自ら注意が向けられた時を逃さずにほめる、④授業そのものが魅力的である、などがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・注意喚起 ・沈黙の活用 ・視覚教材の活用 ・話を「聞く」と「板書を写す」場面を分ける ・同じ立ち位置 ・端的な説明 ・興味を引きつける教材の工夫 	<p>「③視覚や触覚に訴える教材・教具が準備されている授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →一度に複数の情報処理は誰にとっても優しいものではない。今、重要となる情報源に児童生徒自ら注意を向けることで集中して、情報がキャッチできる。</p>
9 指示の出し方	<p>記憶に残りやすい指示は、①話の前に注意を喚起する、②指示する内容が明確で具体的である、③聞く側にとって要点を整理しやすい、いつまで集中して聞いていればいいのか終わりが見通せる、などがある。</p> <p>そのためには、①「しっかり」「ちゃんと」などの曖昧な言い回しは避け避け、②明示性の高い具体的な表現を用い、③視覚的な情報を活用する、③「1つめ...、2つめ...」のように列挙法の活用、などがポイントとなる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の始まりと終わりを明確に示す ・具体的に話す（×「しっかり」×「ちゃんと」） ・肯定的な表現（×「走るな」、○「廊下は歩きます」） 	<p>「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」 →教師自身が最も重要な学習環境であり、言語環境を整理することは児童生徒の「わかりやすさ」の基本である。</p>
10 参加の促進	<p>教科教育の中で培われてきた「わかる授業」の工夫の中には、ユニバーサルデザインの視点が多く含まれている。</p> <p>学習活動を活発にし、授業への参加を促進するには、①学習へのモチベーションを高める、②間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる、③多様な学習スタイルがある、④学習のポイントをつかめる教材の工夫、⑤参加のための支援・援助、などがある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・helpカード、ヒントカードの活用 ・多様な解決方法を示す ・プリント教材、ワークシートの工夫 	<p>この項目は、授業UDの7原則全ての要素が含まれる。特に「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」「⑤間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業」の視点で工夫が望まれる。</p>
11 個人差への配慮	<p>学級には、たくさんの個性を持った児童生徒がおり、いろいろな能力差や得意・不得意などの個人差があることを前提とした学級経営や授業づくりが望まれる。</p> <p>それは決して「特別扱い」という発想ではなく、必要であれば「誰でも受けることのできる支援」と考えたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活躍できる場の用意（分業化） ・選べる教材 ・個別の補助教材や教具の活用 ・学力に合わせた教材の工夫 	<p>特に「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」「⑥現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業」「⑦必要な学習活動に十分に組み入れる課題設定がなされている授業」の視点は重要。</p>
12 学級モラルの形成	<p>学習に有効な手立てであっても、自分だけ「特別扱い」と感じると個別的な対応を嫌がり受け入れたがらない児童生徒は多い。</p> <p>個人差への配慮が学級に自然なものと受け入れられるには、①日頃からお互いの個性を認め合う風土が培われ、②児童生徒が「価値の多様さ」に気付けることが不可欠である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・助け合いや認め合いの場面の設定 ・集会や学級通信の活用 	<p>「①全ての児童生徒が参加できる授業」 →学びの共同体としての意識を培うことである。</p>